

# 現代日本語における「せっかくの」の意味と用法

許 燕

キーワード：副詞、逆接、順接、評価性、多義性

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

本稿は、副詞「せっかく」の本質を追究する研究の一環として、現代日本語における「せっかくの」の意味と用法をその実証研究を通して追究するものである。なお且つ、日本語教育に資するべく、「せっかくの」の共起形式による意味考察を通してその性質を明らかにすることを目的とする。

拙稿 [2020] では、「せっかく」の用法を、＜副詞用法＞＜連体用法＞＜擬似述語用法＞の三つに分類した。ここでは、下記の実例 (1) のような「せっかく～のに／のだから」に代表される連用修飾関係、(2) の「せっかく～N (名詞およびそれに準ずる形式)」に代表される連体修飾関係を＜副詞用法＞とした。また、(3) のような「せっかくのN (名詞およびそれに準ずる形式)」を＜連体用法＞、(4) の「せっかくだが／だから～」に代表される用法を主語が取れない述語であるという認識から＜擬似述語用法＞に分類した。

- (1) すでに修一郎には弁護士がついていた。行助は弁護士をことわった。「お父さんがせっかくいい弁護士を世話してくれたのに、ことわるのはどうかね」と徳山刑事は言った。(『冬の旅』 - 立原正秋)
- (2) その姉たちの何分の一すらも、「奥」では桃子を重要視する気配がなかった。「制服がいけないのだ」と桃子は考え、せっかく入学した 学校 へゆくのも厭になった。(『楡家の人びと』 - 北杜夫)
- (3) 「覚えてる」栄二はそう云って酒を啜り、背筋をまっすぐに坐り直した、「せっかくの お別れだ、その話はよそう」「どんな人間だって独りで生きるもんじゃない」と与平は栄二の言葉を聞きながして続けた。(『さぶ』 - 山本周五郎)
- (4) 「まあ、そういう訳で、折角ですが、もうどうにもなりません」と言った。(『青春の蹉跎』 - 石川達三)

本稿では、以上の用法分類に基づき、「せっかく」の＜連体用法＞である「せっかくのN (名詞およびそれに準ずる形式)」の意味と用法を、その後続形式に着目して分析・考察を加える。また、「せっかくの」は「せっかく+助詞『の』」であると考えられる。

## 1.2 辞書・辞典における記述

副詞「せっかく」の先行研究は一定数に上る。しかし、「せっかくの」に焦点を当てて記述したものは、管見を述べると一部(河原崎 [1976]、小矢野 [1995] [1997a])に限られる。その上、国語辞書における記述も、「せっかく」の品詞的位置づけは定まっておらず、「せっかくの」の項目における解釈がさまざまである。

本稿では、「せっかくの」の先行研究を検討するにあたり、初めに辞書・辞典の記述を再考することとする。ここでは、国語辞書・辞典の選定において、まず現代語重視であると思われる『大辞林』を、次に古い用法を優先的に取りあげている『広辞苑』を、それから現代語と古代語の両方の記述がなされている『日本国語大辞典』を、最後にインターネット検索でトップにヒットする『デジタル大辞泉』の順に述べる。

なお、本稿では引用および用例を提示する際、一文の前件と後件の関係が逆接関係の場合は、「せっかくの N だが」、順接関係の場合は「せっかくの N だから」のように、各種下線や囲み線を用いてその関係性をより可視化できるようにした。

まず、『大辞林』による記述を見てみよう。ここで着目すべき点は「せっかくの」が{【一】〔副〕}の項目で取りあげているという点である。また、下記のとおり①に現代語における意味を三つに分類して記述している。しかし、それぞれの例文からも分かるように、ここでは形式より「努力・尽力・期待」や「相手の努力・尽力・期待」、「稀にしかないこと、幸運」が実現できず「残念だ、惜しい」という意味に重きが置かれ、「せっかく」と「せっかくの」を区別せず記述している。

①努力・尽力・期待が空しくなって残念に思う意を表す。「一知らせてやったのに」「一楽しみにしていたのに雨に流れてしまった」「一の手料理が冷めてしまった」

②相手の努力・尽力・期待にこたえられなくて、申し訳ない気持ちを表す。「一おいでいただきましたのに…」「一の誘いですが」

③種にしかないこと、幸運などが無駄になって、または、生かせなくて惜しい、残念だ、という気持ちを表す。「子供が一泣きやんだのに…」「一の美貌も台無しだ」「一きれいに咲いたのに見る人がいない」(『大辞林<第三版>』[2006] 1339頁)

一方、『広辞苑』では、『大辞林』と異なり「せっかくの」の用法を{【一】〔名〕}の項目で取りあげている。また、『大辞林』の①と②の意味を①に統合している。つまり、行為者が自分であるか相手であるかを区別せずに、「骨を折る」という意味に「せっかくの好意」のような用例を挙げている。さらに、『大辞林』と同じく形に着目せず、「せっかくだが」「せっかくだから」に代表される擬似述語用法(許 [2020])と同一視して「せっかくの」を記している。

①力を尽くすこと。骨を折ること。心を砕くこと。「一の好意」「一だが断る」「一だからもらっておく」②困難。難儀。<日葡辞書>③めったになく、大切であること。特別。「一の休日が雨になった」(『広辞苑<第七版>』[2018] 1637頁)

これに対して、『日本国語大辞典』は、名詞用法を先に述べ、「せっかくの」は{【二】

〔副〕の4番目にまとめられている。その上、「せっかくの」の意味は細分されていないが、「体言を修飾」という機能が明確に言及されている点で『大辞林』とも『広辞苑』とも異なっているのだ。

(「せっかくの」の形で、体言を修飾して)それが十分な効果を発揮しなくては惜しいさま。\*歌舞伎・お染久松色読販〔1813〕序幕「折角のお心ざしだ、お貰ひ申て置ませうかへ」/ \*和英語林集成(初版)〔1867〕「Sekkaku(セツカク)ノホネオリガムダニナツタ」/ \*行人〔1912～13〕<夏目漱石>友達・一一「自分は折角(セツカク)の好意だけれども宝塚行を断った」(『日本国語大辞典<第二版>』〔2007〕1368頁)

体言を修飾する機能に言及している点において『デジタル大辞泉』は、『日本国語大辞典』と同様である。また、『大辞林』と同じく【一】〔副〕に位置付けている。しかし、意味の解釈においては、名詞用法で取りあげている『広辞苑』同様、行為者を問題視せず「無理をして。苦勞して。わざわざ。」の意味で「一のみやげを～」を取りあげている。さらに、1の「せっかくのみやげを…」は、2の「〔折角の〕」の形で、体言に続けて}とは別に項目立てられている。加えて、【用法】の項目が設けられており、「せっかくの好意を～」のような「名詞的用法」があるとも記述している。

1 いろいろの困難を排して事をするさま。無理をして。苦勞して。わざわざ。「一來てくれたんだから、ゆっくりしていきなさい」「一のみやげを汽車の中に置き忘れた」

2 (「折角の」の形で、体言に続けて) 滅多に得られない、恵まれた状況を大切に思う気持ちを表す。「一の休日だから、どこにも出かけたくない」「一の好機を逃がしてしまった」

【用法】「せっかく」には「せっかくの好意を無駄にする」「せっかくだが断る」のような名詞的用法もある。(『デジタル大辞泉<第二版>』〔2012〕)

このように、『デジタル大辞泉』は意味のみならず、用法の記述までなされている。ただ、学習者とりわけ非母語話者にとっては一層紛らわしい説明になっていると言わざるを得ない。「せっかく」の使い方が分からず辞書を引いた学習者は、まず「一のみやげを～」は2の「〔折角の〕」の形で、体言に続けて}には含まれないのかと迷ってしまうに違いない。次に、この「せっかく」は品詞的に「副詞?」「名詞?」と頭を悩ますだろう。デジタル化が進んでいる今日の学習者にとって、『デジタル大辞泉』はトップにヒットする辞書の一つである。しかし、上述のような解釈は、辞書の使用目的に反して学習者を惑わすものになり得るのではなかろうか。つまり、分からないから辞書を調べたにもかかわらず、かえって分からなくなってしまう典型例であると言えよう。

実は、日本語学習者であり教える立場にもいる筆者も幾度となくこれらの辞書記述には頭を悩ませてきた。ただし、実は辞書記述にだけ問題があるわけでもないのだ。外国語に置き換えることが難しいがために日本語独特な表現の一つと考えられる「せっかく」の特異性が、概観してきたように不明確かつ不明瞭な辞書記述を生み出していると言っても過言ではないだろう。これは、「せっかく」を研究対象に選んだ本研究の目的の一つでもあるのだ。

### 1.3 先行研究と本稿の立場

「せっかく」の先行研究において、渡辺 [1980] は後の研究に多大な影響を与えている。渡辺は「せっかく」の意味を綿密に規定した上で、その用法を7つに分類し、評価の副詞「せっかく」が、「次第次第にパートナーを併呑して行く様 (329頁)」を記述している。要するに、下記の①の用法は古体として研究対象から外し、①②が圧縮して③④の用法が生まれ、③④が圧縮して⑤⑥の用法、さらに⑦の用法が生まれてきたと指摘している。

- ① せっかく [A: 価値アル事態] → 勧誘
- せっかく勉強するように。
- ① せっかく [A: (上ニ同ジ)] + [B: Aニ随伴シテ期待(未実現)サレル事態] → 意志・希望・命令・勧誘
- せっかくここまで来たのだから、二三日泊まってお行き。
- ② せっかく [A: (上ニ同ジ)] + [B: (上ニ同ジ)] × 否定 (未確定デモ確定デモ) → 惜しみ・恨みナド
- せっかくここまで来たのに、もう帰るのか。
- ③ せっかくの [a: 価値アル事態ノA一項] + [B: (上ニ同ジ)] → 意志・希望・命令・勧誘
- せっかくのチャンスを利用しようよ。
- ④ せっかくの [a: (上ニ同ジ)] + [B: (上ニ同ジ)] × 否定 (②ノ場合ニ同ジ) → 惜しみ・恨み
- せっかくの花が散ってしまった。
- ⑤ せっかくだ (Aソノモノヲ含ム) + [B: (上ニ同ジ)] → 意志・勧誘
- せっかくだから引き受けよう。
- ⑥ せっかくだ (⑤ノ場合ニ同ジ) + [B: (上ニ同ジ)] × 否定 (未確定)
- せっかくだが 辞退しよう。
- ⑦ せっかくだ (A + B × 確定的否定 ソノスベテヲ含ム) → 同情
- せっかくだったね。

(渡辺 [1980]: 原文引用は『国語意味論』[2002] 328-329頁 下線は筆者による)

一方、「せっかく」の先行研究においてもっとも早いとされるのが河原崎 [1976] である。河原崎は一貫して「せっかく」の意味変遷を指摘している。「苦勞の末→得がたい→貴重な→ありがたい→感謝すべき→御好意→余計なお世話」に移行していくプロセスを、「せっかく」の代表的な文型を通して述べている。また、「せっかくの」「せっかくだが」「せっかくだから」が単なる圧縮表現でないと指摘している。「相手のご厚意がない場合」、渡辺の③④が⑤⑥に圧縮される用法は成り立たないと述べている。したがって、下記のような用例の場合、下線部の「せっかくの日曜日ですが」を「せっかくですが〜」に、「せっかくのボーナスだが」を「せっかくだが〜」に圧縮してしまうと、本来の文の叙述内容とは異なるものになってしまうため、両者は変換できないとしている。

- ・ せっかくの日曜日ですが、金がなくてどこへも行けません。
- ・ せっかくのボーナスだが、住宅ローンに半分以上もっていかれる。

(河原崎幹夫 [1976] 85頁 下線は筆者による)

しかし、河原崎は「せっかくの〔N〕のに〜。」も「せっかくの〜が／けれど(も)、〜。」も「せっかく 〔V〕 た〔N〕 を／が〜」も同様であるとし、使用形式による分類より意味的な逆接関係と順接関係にのみ着目して記述している。そのため、「せっかく」の位置づけに関しては具体的な言及がなされていないのである。

これに対し、小矢野 [1996] は、「せっかく」を評価のモダリティ副詞とし、「幸い」と比較しながら文脈の重要性について強調している。また、「せっかくの」を「規定語」として取り出し、共起する名詞と動詞の「語彙的な意味と価値評価づけ」の分析を行っている(小矢野 [1997a])。ただ、共起する接続助詞の前後にくる品詞(主に動詞と名詞)の意味的分類だけが重要視されており、その使用形式による分類は従属節に後続する接続助詞を並べたに過ぎないという課題が残されている。

その他、森田 [1980] は「せっかく」に後続する品詞による分類になっており、「せっかくの」に関しては、「名詞に係る言い方：せっかくの努力(森田 [1980] 216頁)」としか言及されていない。

本稿では、上述の先行研究を踏まえたうえで、「せっかくの」意味と用法の記述を通して「せっかく」全用法における位置づけと、その後続形式による逆接と順接の相関および多義性の考察を進める。

#### 1.4 研究対象と調査方法

本稿では、二つの検索方法を用いて用例収集を行った。一つは、テキストファイル化した脚注のデータベース<sup>1</sup>を対象に、「せっかくの」、「折角の」、「セツカクの」で文字列検索を実行する方法である。これにより「せっかくの」の用例を149例集めることができた。もう一つは、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』<sup>2</sup>を活用したデータ収集方法である。具体的には、検索キーを語彙素「折角」に、後方共起1「キーから1語」を「語彙素」「の」に設定して277例を収集した。それから目視により、

表 1-1 「せっかくの」の資料別用例分布

資料別	発行年	用例数
新潮文庫の100冊	1948-1991年	86
新潮文庫の絶版100冊	1949-1990年	58
CASTEL / J	1967-1992年	5
BCCWJ (特定目的・ベストセラー)	1976-2005年	37
BCCWJ (出版・書籍)	2001-2005年	175
BCCWJ (新聞)	2001-2005年	2
BCCWJ (雑誌)	2001-2005年	39
合計		402

明治の文豪尾崎紅葉の『三人妻』より2例、翻訳作品<sup>3</sup>から22例を除いた、253例を本研究の対象とする。前頁の表1-1は、研究対象の全用例数と資料別の分類表である。

なお、本稿は記述の便宜上、本文の記述（直接引用や実例を除く）において「せっかくの」の各表記（「せっかくの」、「折角の」、「セッカクの」）を「せっかくの」に統一する。

## 2. 従属節における「せっかくの」の考察

副詞は単独で連用修飾語に立つのが基本である。本稿は、「せっかくの」は単なる「せっかく」の連体用法ではなく、それ自体が独自の意味と機能を持つ一語であると考え。ここでは、「せっかくの」を主文と従属節それぞれに分けて分析を加える。まずは、全体の大多数となっている従属節から見ていこう。表2-1からも分かるように、従属節に用いられている「せっかくの」は386例と全用例の96.0%を占めている。逆接と順接の具体的な用例数は次の表のとおりである。

本稿では、「せっかく」の副詞用法同様、連体用法である「せっかくの」を<逆接条件関係>、<準逆接条件関係>、<順接条件関係>、<準順接条件関係>、<逆接・順接両義の条件関係>に分類して検証する。

ここでは、「せっかくのNなのに／だが／だけれど」のような明確な逆接関係を表す用例を<逆接条件関係>に分類する。また、「せっかくのNが／を／も」など、本来は逆接・順接の意味を持たない助詞（およびそれに準ずる形式）が後続形式になっており、かつ文脈から逆接関係が読み取れる用例を<準逆接条件関係>とする。順接においては、「せっかくのNだから／なので」のような明らかな順接関係の用例を<順接条件関係>に、「せっかくのNを／に／は」のような、文中で順接関係と判断可能な用例を<準順接条件関係>に分類する。さらに、「せっかくのチャンスを見のがすのはどうでしょうかね（立原正秋『冬の旅』）」のように、文脈から逆接と順接の両方の解釈が可能な用例を<逆接・順接両義の条件関係>とし、分析を行った。

以上の接続関係を踏まえて表2-1を見てみると、逆接と準逆接を合わせた用例は312例出現しており、これは全402例の77.6%となっている。このように、「せっかくの」においても、逆接関係の用例は順接関係を大幅に上回っている。そのうえ、逆接関係の用例がおおよそ8割を占めており、「せっかく」の副詞用法の7割弱（許[2020]）をも超えてい

表2-1 「せっかくのN」の接続関係の分布

用法	接続関係	逆接	準逆接	順接	準順接	逆・順両義	小計	合計
連体用法	主文	1	1	2	11	1	16	402
	従属節	26	286	31	39	4	386	
割合 (%)		6.7	71.4	8.2	12.4	1.3		100
逆接・順接別割合 (%)		78.1		20.6		1.3		100

ることが考察できた。

### 2.1 逆接条件関係

本節では、従属節における逆接関係について述べよう。表2-2によると、「せっかくのN なのに／だが／だけれど」のような明確な逆接関係を表す用例は26例である。次の(5)～(7)は、それぞれ名詞に「なのに」「ですが」「ですけれど」の逆接表現が後続する用例である。

- (5) どうやら行列見物の女客に、ひどく突き当たってしまったらしい。「嫌だわ、あなた。気をつけてよ。せっかくの 芝居見物 なのに、裾が汚れたじゃないの。それでねえ、妹妹、ついさっき南美茶館で聞いたのよ。なんでも、樹林房が出入りの戯苑に珍しい芝居をかけさせるんですって」(真堂樹『花片戯曲』)

表2-2 従属節における「せっかくのN」の後続形式の分布

接続関係	後続形式	用例数	接続関係	後続形式	用例数	
逆接	のに	10	順接	だから	21	
	だが	9		ので	6	
	だけれど	5		だし	2	
	でも	1		ゆえ	2	
	ながら	1		小計3	31	
	小計1	26		準順接	を	25
準逆接	が	88	の形式		6	
	を	83	に		2	
	も	66	から		2	
	に	23	が		1	
	は	10	で(格助詞)		1	
	の形式	3	は		1	
	の	3	ということで		1	
	から	2	小計4		39	
	に対して	2	合計2		70	
	にも	1	接続関係 逆・順両義	後続形式	用例数	
にまで	1	を		4		
にだって	1	合計3		4		
で(格助詞)	1	合計1		312		
とは(であるの意)	1			総計(合計1+合計2+合計3)		
さえも	1					386
小計2	286					

- (6) 竹村は、「せっかくの お誘い ですが、夕刻、京都で仕事関係で人と会う約束をしておりますので—」「ほんならどこかご案内だけでもさせて貰いまひよか、仏さんもお二人方にお詣りしてもろて、充分、満足してはります」(山崎豊子『不毛地帯』)
- (7) 「折角の 御親切 ですが、あの子は私が何とかやってみますわ。今日も母親との会がありましたけれど、だれも浅井のことは言うておりませんでした。私は直接には、そういう親たちの不平は聞いておりません」(石川達三『人間の壁』)

「せっかくの」の逆接関係において、もっとも多く出現したのが「[だ・である／な]のに」と「のに」を伴う用例であるが、それでもわずか10例に過ぎなかった。また、「だが」や「だけれど」のような他の逆接表現に比べ「のに」に偏る傾向も見られなかった。これは、「のに」との共起形式が全逆接関係の6割強を占めている副詞用法と対照的である。そのうえ、副詞用法では「のに」に次いで多かった「ても」も、連体用法では考察できたのが下記の1例のみである。

- (8) 「流水か」「んだ。船さカッチャキ(ひっかき)やがって、危ねえとこだった。せっかくの 大漁 でもけるのがゆるくねえわ。見れ」漁師は海に顎をしゃくった。防波堤の切れ目から白い氷の帯が見えた。(加賀乙彦『湿原』)

このように、連体用法「せっかくの」の逆接関係は全逆接の8.3%にあたり、「のに」と共起する副詞用法の95%に比べると大逆転現象を呈しているのだ。では、なぜこのような対照的な事象が見られたのか。主な理由として、「せっかくの」が修飾しているのが「名詞およびそれに準ずる形式」、つまり連体修飾であることが考えられる。連体修飾の場合は、「のに」や「だが」のような主として連用修飾に用いられる接続表現を必要としないのではなかろうか。渡辺や小矢野により「圧縮表現」であると考えられる「せっかくの」は、N(名詞およびそれに準ずる形式)に後続しやすい格助詞やとりたて助詞を求めているのかもしれない。

## 2.2 準逆接条件関係

ここでは、「せっかくのNが／も」など、本来は逆接・順接の意味を持たない助詞(およびそれに準ずる形式)が後続する<準逆接条件関係>について記述を行う。表2-2で提示しているとおり、これらの助詞は本来逆接と順接のどちらも表していないのである。しかし、「せっかくの」を冠することにより、文脈の中で逆接関係が成り立つ一群である。前掲の表2-2は、これらの助詞を用例数の多い順に並べたものである。下記は、用例数が比較的多かったものの代表例である。(9)～(11)は格助詞の例であり、(12)(13)はとりたて助詞の例である。

- (9) 生け垣の向こうを車が行き交い、ドライバーが休みを取っているのか、トラックが止まっただま動かない。せっかくの 石庭 が、知事公館が「借景」であるため、画竜点睛を欠いたようだった。(北海道新聞夕刊 2003/6/25)
- (10) 自分自身の思い違いや、自分勝手な理由をつけて、せっかくの人脈創りの 機会 を自分



の手でつみとってしまう人がいるからです。はっきりいうと、自分の側に責任があるのに、会のせいにする人がいるのです。(佐藤義雄『「人脈」創る・育てる・活かす』)

- (11) 私も二度目だけど、前はすぐマウイに行ってゴルフしてテニスして潜ってリゾートライフ満喫って感じで、せっかくの 大自然 に目を向けてなかった。ヘイアウとか名前すら知らなかったし…。(乃間修/真野匡『無敵のハワイ』)
- (12) 彼らはその足で上書をたずさえて、家老荒尾千葉之助の旅館に行って斬奸の趣意を述べた。しかし、翌日、八・一八政変が起こり、せっかくのテロリズムの 意図 は空しくついていたのである。(森川哲郎『幕末暗殺史』)
- (13) だが、今後のデイ・ケア充実のためにはデイ・ケア各施設が、分化・分業について意識的に研究をしないと、施設相互間の協働にも支障をきたし、折角の 社会投資 も有効に生かせないことになる。ことにデイ・ホスピタルで扱う対象をもっとはっきりと選別しなければならぬとの指摘がなされている。(吉田寿三郎『高齢化社会』)

また、準逆接関係における見てみると分かるように、その後続形式はほぼ格助詞ととりたて助詞になっている。格助詞の「が」の用例が88例ともっとも多く、ほぼ差をつけず「を」が83例見られた。また、とりたて助詞の「も」が後続する用例が比較的多く66例である。しかし、歴史的にはとりたて助詞「も」の実例が「が」や「を」を大幅に超過しているが、史の変遷については稿を改めて述べることにする。

さらに、準逆接条件関係には、(10)のように、「～てしまう」と共起する用例が数多く見られた。このように、格助詞やとりたて助詞が後続する「せっかくの」は、文末に「～てしまう」を従わせ逆接の意味合いをより強めていると考えられる。

### 2.3 順接条件関係

では、順接条件関係について見てみよう。順接の場合、「せっかくのNだから」の用例が21例ともっとも上位を占めていた。これは、順接条件関係全31例の67.7%となっている。次の(14)はその1例である。逆接関係とは対照的に、<順接条件関係>では後続形式が格助詞やとりたて助詞より「だから」に集中しており、これは副詞用法順接関係とも一致する特徴である。

- (14) 社長「ああ、無線LANによる業務改善の事例取材らしい。そこで相談なんだが、せっかくの 取材 だから、もうちょっと何かできないかと思ってねえ」(堀口幹友『ネットワークマガジン』)

ただし、上記の21例中(15)のように「せっかくのNなのだから」と、「なの」が介在する用例はわずか5例のみである。これは、順接条件関係において「せっかく～のだから」に用例が集中している副詞用法とは明らかに異なっている。

- (15) 頭をカラッポにするには、真剣になりすぎている。「よし！勝負だ。どっちが先に釣れるか」「もう！せっかくの 休日 なんですから、やめましょうよ。そういうの」「こういうのは勝負しなきゃつまないだろ！」(浅野美和子『笑顔の法則』)

「せっかくのNだから」に比べ、「せっかくのNなのだから」の実例が少ない理由はどこにあるのだろうか。通説的に「のだから」は、助詞「の」に助動詞「だ」がついて「のだ」になり、そこにさらに原因・理由を表す助詞「から」が付いてできたものであると考えられている。

松村 [1969] によると、「の」は、下に「だ」をつけ「のだ」の形で、ある事柄について断定的に、あるいは説明的に述べる場合に用いるという「のだから=の(助詞)+だ(助動詞)+から(助詞)」。しかし、「せっかくの」は、N(名詞およびそれに準ずる形式)を修飾しているため、構文上「の」をつけて名詞化する必要がないのだ。

これに対して、次の(16)のように、「せっかくの」に「ので」が後続する場合は、「なので」の用例が6例中5例を占めていた。「ので」の場合は、名詞に直接後続できないため、常体表現において「なので」は必要不可欠である。(17)は、敬体の用例のため、「ですので」の形を取っている1例である。

(16) このときのポイントは、せっかくの チャンスボール なので、ミスをしないように打つこと。ミスをしてしまうのは、気持ちが焦ってしまい、通常のヒッティングゾーンよりも前で捕らえてしまうからだ。(藁谷雅之/酒井朋子『T.Tennis (T.T)』)

(17) こんなに載いていいかどうかわたくしには判断つきません。でも、折角の 御好意 ですので思いきって戴くことにいたしましょう」多津子の顔にははっきりと感謝の気持ちが現われていた。(井上靖『射程』)

#### 2.4 準順接条件関係

本稿により、<準順接条件関係>に分類された「せっかくのNを／に」のような用例は39例あり、これは70例ある順接条件関係の55.7%にあたる。中でも、「せっかくのNを」の用例が25例ともっとも多く、次いで助詞が省略された「せっかくの〇形式」が目立った。下記の(18)は「を」の例、(19)は〇形式の用例である。

(18) 現金郵送の趣旨が分からず、このままでは遺失物扱いとして処理されるため、同署は「せっかくの 善意 を生かしたい」と本人の名乗り出を待っている。(中国新聞朝刊2002/1/30)

(19) このように、「開業する」というそのこと自体に対する補助金ではなくても、開業する目的や、開業する際の状況などによっては、使える補助金があったりするんです。せっかくの 補助金、上手に使いましょね。(小松由和/枝清美『誰も教えてくれなかったおいしい独立・起業成功マニュアル』)

表2-3が示しているように、順接関係において、特記すべきことは<順接条件関係>と<準順接条件関係>の用例の数にさほど差が見られなかったことである。これは逆接関係でも見られた特徴である。要するに、順接の場合でも、9割強が「せっかく～のだから」に集中している副詞用法とは対照的に、「せっかくの」は順接と準順接の関係性において偏りに傾向が見られなかったのである。

## 2.5 逆接・順接の両義

本稿では、前述のように、逆接とも順接とも解釈が可能な用例を<逆接・順接両義の条件関係>と規定している。本研究対象の考察によると、逆接・順接の両義の解釈が可能な4例は、すべて格助詞「を」とともに使われていた。(20)は「せっかくの誘いだから断るのが悪い」と言い換えることも、「せっかくのお誘いなのに断る」にまでかかる考えることも可能ではないだろうか。(21)(22)も、これに倣い説明できる用例である。

(20) 私が店の中を覗き込むような仕草をすると、「コーヒー、呑まないですか？」とエディが言った。少し迷ったが、せっかくの 誘い を断わるのも悪いような気がした。「ひとりで、どうしたんです？」私が訊ねると、エディは肩をすくめた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(21) ところが、途中で英訳が出版されます。私が取り上げた同じ作品の英訳です。その場合私は、自分のせっかくの 翻訳 を使った方がいいか、〇〇先生の新しい翻訳を使うべきか、迷うわけです。(ドナルド・キーン／実著者不明『日本文学は世界のかけ橋』)

(22) 「まあまあ。これから彼女たちに術を解くためのコンサートをやらせてもらうんですから」結城がのほほんとした口調でその場をとりなそうとした。「何を言っているんだ。せっかくの おとな しく 勉強 好き な 生徒 を、わざわざもとに戻す必要はないじゃないか」理事長が言うと、教頭がもみ手をしながらあいそ笑いをした。(楠未莉『ミニモニ。におまかせっ!』)

## 3. 主文における「せっかくの」の考察

本節では、主文における「せっかくの」について検討することとする。次の表3-1はその接続関係と用例数を表している。

表3-1 主文における「せっかくの」の分布

接続関係	逆接	準逆接	順接	準順接	逆・順両義	小計
主文	1	1	2	11	1	16
合計	2		13		1	16
割合 (%)	12.5		81.3		6.2	100

本稿では、(23)の「なのに」や(25)の「だから」のように、逆接や順接の接続表現と共起する用例をそれぞれ主文における<逆接条件関係><順接条件関係>に分類している。また、文脈から「せっかくのコレクションなのに惜しいなあ」と言い換えられる(24)と、「せっかくのお別れだから、その話はよそう」と解釈できる(26)のような用例を<準逆接条件関係><準順接条件関係>と見なした。もとより、上述のような解釈が成立する時点で(23)～(26)のような構文が純然たる「主文」であると見なせないことは明白である。しかし、第2節で取りあげてきた用法に比べ異質なのも事実である。そのた

め、本稿は下記のような例を、「主文」に分類し記述することにする。

- (23) 加藤はふりむかなかつた。なにかこうおおぜいの人に、よってたかってばかにされたような気がしてならなかつた。「折角の 日曜日 なのに」加藤はつぶやいた。外山三郎が遊びに來いと行ったから、山へ行くのをやめて行ったのだと、加藤は鬱積したものを、外山三郎に当りちらしながら坂をおりていった。(新田次郎『孤高の人』)
- (24) 「なあみんな、このパンフレット、どう始末しようか」「捨てるほかねえよ」と十二四郎が言下に断定した。「しかし惜しいなあ、せっかくの コレクション」と六次郎が十冊ばかり手に取って、ぱらぱらとめくった。「惜しいもんか。こういうものは時期遅れになったとたん紙屑だ」と八三郎。(加賀乙彦『夕映えの人』)
- (25) 「ところで、静枝さんは、何時ごろ、出かけるつもりだね?」「お客さん次第ですよ。お客さんの支度ができたら、すぐにも出かけられます」「それじゃあ、ゆっくりめしなんか食っていたら悪いな。せっかくの貴重な 休日 だからね」横渡が慌てて飯をかきこもうとすると、「いいんです。どうせ私、お給仕いたしますからゆっくり召し上がってください」と二人のかたわらに坐った。(森村誠一『人間の証明』)
- (26) 「わたしは三人とも知ってるよ、そしていつだったか、さぶという人にもっとやさしくしてやったらどうか、と云ったことがある筈だ」「覚えてる」栄二はそう云って酒を啜り、背筋をまっすぐに坐り直した、「せっかくの お別れ だ、その話はよそう」「どんな人間だって独りで生きるもんじゃあない」(山本周五郎『さぶ』)

主文に用いられている「せっかくの」は、その接続関係において従属節とは対照的な性質を呈している。表3-1からも見られるように、逆接と順接が逆転しているのだ。「せっかくの」の使用例において、順接の用例数が逆接を上回るのはこの主文の述語にかかる場合のみである。また、これは「せっかくの」の独自の特徴ではなく、「せっかく」の副詞用法にも見られた事象である。

そして、主文にかかる「せっかくの」にも、逆接と順接の両方に解釈可能な用例が1例ではあるが確認できた。つまり、次の(27)は、「せっかくの舞台設定だから、これぐらいでくたばったらだめ」とも、「せっかくの舞台設定なのに、これぐらいでくたばるの」とも読み取れるのだ。

- (27) 「…頼むから、もう少しでいい。あと、もう少しだけでいいんだ。手応えてやつを感じさせてくれ」乾いた岩盤に仰向けに転がったまま、内海は、その妙に掠れた声を聞いていた。「なあ、あんた。せっかくのお誂え向きの 舞台設定 なんだ。まさか、これぐらいでくたばったりしないよな?もう、これで終わりっていうんじゃないだろうな?」その響きは、やっぱり掠れて聞こえる。(朋秋一『変身』)

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、現代日本語における「せっかく」の連体用法「せっかくのN(名詞およびそれに準ずる形式)」について考察し、以下のようなことが分かった。ここでは、1.1節で記

述した、「せっかく～ののに／のだから」に代表される連用修飾関係と「せっかく～N(名詞およびそれに準ずる形式)」に代表される連体修飾関係を含めた<副詞用法>と比較しつつ述べることにする。

まず、「せっかくの」が従属節にかかる場合、逆接条件関係の実例が圧倒的に多く、副詞用法の7割弱をも上回り約8割占めており、逆接と順接の相関関係がより顕著に表れた。

次に、「せっかくの」が主文にかかる場合、逆接と順接が逆転しており、順接関係が8割以上を占めていることが判明した。なお、この逆転現象は副詞用法でも同様に見られた。

さらに、<逆接条件関係>において、共起形式が「ののに」に集中している副詞用法とは性質を異にし、本来は逆接・順接の意味を持たない「せっかくのNを／に／は」のような助詞を後続する用例数が「せっかくのNなのに」を大幅に上回った。

最後に、<順接条件関係>において、順接の接続表現と共起する用例と「せっかくのNを／に」のような格助詞やとりたて助詞の用例数がほぼ同じだった。これは、「せっかく～のだから」の用例が大多数を占める副詞用法と対照的である。

今後は、意志性が全面に出る「わざわざの」や、典型的な評価性を示している「あいにくの」「さいわいの」との比較の中で、共時的な視点から「せっかくの」の考察を深めていく予定である。

## 注

- 1 『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(翻訳作品33冊を除いた、昭和戦後の45冊71作品)  
『CD-ROM 版新潮文庫の絶版100冊』(翻訳作品32冊を除いた、昭和戦後の39冊75作品)  
『CD-ROM 版CASTEL / J』(日本語教育支援システム研究会より「講談社新書」40冊の内小辞典3冊を除いた37冊)
- 2 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 国立国語研究所(特定目的・ベストセラー／出版・書籍／新聞・雑誌 コア・非コアを含む)
- 3 翻訳作品は自然な日本語でないと判断し除外した。

## 参考文献

- 石神照雄 [1982] 「様相副詞『セツカク』と構文構造」『信州大学教養部紀要』16、1-13頁
- 林禔映 [2016] 「副詞『せっかく』の史的変遷」『国語と国文学』93-8 東京大学国語国文学会、53-68頁
- 河原崎幹夫 [1976] 「副詞の導入の具体的研究2 『せっかく』(付『わざわざ』)」『日本語学校論集』3 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校 79-90頁
- 許燕 [2020] 「現代日本語における副詞『せっかく』の意味・機能をめぐって」『桜美林論考 言語文化研究』11、73-93頁
- 工藤浩 [1982] 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集』3 秀英出版、45-92頁
- 工藤浩 [1989] 「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39、13-33頁

- 工藤浩 [1996] 「『どうしても』考」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房、163-192頁
- 工藤浩 [1997] 「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房、55-72頁
- 工藤浩 [2000] 「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店、161-234頁
- 工藤浩 [2005] 「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-8 東京大学国語国文学会、1-15頁
- 小矢野哲夫 [1995] 「格くずれ—ひとえ文とあわせ文とのあいだ—」仁田義雄編『複文の研究 (上)』くろしお出版、1-26頁
- 小矢野哲夫 [1996] 「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件—『幸い』と『せっかく』を例にして—」『日本語・日本文化研究』6 大阪外国語大学日本語講座、1-16頁
- 小矢野哲夫 [1997a] 「規定語『せっかくの』の構文機能」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院、195-208頁
- 小矢野哲夫 [1997b] 「副詞『せっかく』の用法」『日本語・日本文化研究』7 大阪外国語大学日本語講座、1-16頁
- 田野村忠温 [1990] 『現代日本語の文法I—「のだ」の意味と用法—』和泉書院〔[2002] 再刊を参照〕
- 仁田義雄 [1987] 「条件づけとその周辺」『日本語学』9月号 明治書院、13-27頁
- 野田春美 [1997] 『の(だ)の機能』日本語研究叢書9 くろしお出版
- 蓮沼昭子 [1987] 「副詞の語法と社会通念—『せっかく』と『さすがに』を例として」小泉保教授還暦記念論文集編集委員会編『言語学の視界』大学書林、203-222頁
- 蓮沼昭子 [2012] 「事態の既定性と『せっかく』構文」『日本語日本文学』22 創価大学日本語日文学会 19-41頁
- 前田直子 [2009] 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 松村明他編 [1969] 『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 森田良行 [1980] 『基礎日本語2—意味と使い方』角川書店
- 渡辺実 [1971] 『国語構文論』塙書房
- 渡辺実 [1980] 「見越しの評価『せっかく』をめぐる—国語学から言語学へ—」『月刊言語』9-2〔再録：渡辺実 [2002] 『国語意味論』塙書房、317-332頁〕
- 渡辺実 [1997] 「難語「さすが」の共時態と通時態」『国文学科紀要』14〔再録：渡辺実 [2002] 『国語意味論』塙書房、372-389頁〕
- 渡辺実 [2001] 『さすが日本語!』筑摩書房
- 渡辺実 [2002] 『国語意味論』塙書房

## 辞書・辞典類

- 新村出編 [2018] 『広辞苑<第七版>』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編 [2007] 『日本国語大辞典<第二版>』小学館〔初版：日本大辞典刊行会編 [1972-1976] 『日本国語大辞典』小学館〕(JapanKnowledge Lib : <https://sslvpn.obirin.ac.jp/lib/display/,DanaInfo=japanknowledge.com,SSL+?lid=20020262709d9jvaTV68> 2020/08/20参照)
- 松村明編 [2006] 『大辞林<第三版>』三省堂
- 松村明編 [2012] 『デジタル大辞泉<第二版>』三省堂〔2001年4月『大辞泉』初版を元に公開初版：松村明編 [1995] 『大辞泉』三省堂〕(JapanKnowledge Lib : <https://sslvpn.obirin.ac.jp/lib/display/,DanaInfo=japanknowledge.com,SSL+?lid=2001010378600> 2020/08/20参照)

## 言語資料一覧

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 国立国語研究所 (特定目的・ベストセラー／出版・

書籍／新聞・雑誌 コア・非コアを含む)

『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(翻訳作品33冊を除いた、昭和戦後の45冊71作品)

『CD-ROM 版新潮文庫の絶版100冊』(翻訳作品32冊を除いた、昭和戦後の39冊75作品)

『CD-ROM 版 CASTEL / J』(日本語教育支援システム研究会より「講談社新書」40冊の内小辞典3冊を除いた37冊)